

＜°)))≡～ アユの汲み上げ放流の取り組み ＜°)))≡～

内水面漁業研究所 冷水魚養殖グループ

アユは秋に産卵し、ふ化後すぐに川を下り海で成長し、春になると川を遡上します。しかし、堰堤などによって遡上が妨げられることがあります。

そこで、今シーズン、豊川水系の7漁協で構成する豊川水系連絡協議会は、この天然遡上アユを県の許可を得て牟呂松原頭首工で採捕し、同水系上中流域へ放流する取り組み（汲み上げ放流）を始めました。

今年のアユの遡上は良好で、1日で100kg以上を汲み上げ放流した日もありました。この取り組みを始めるにあたり、水産試験場も会議に参加し、汲み上げ放流の有効性や採捕方法などについて関係者と協議を重ねて採捕体制を構築しました。また、愛知県内水面漁業協同組合連合会や牟呂松原頭首工の管理者などの関係機関の理解と協力も得られました。

河川漁協の経営状況は、遊漁者の減少などによって厳しい状況です。汲み上げ放流によって、アユ資源の有効利用に留まらず、天然遡上アユということで遊漁者の関心も高まることを期待しています。

今後、水産試験場では各漁協と連携して、汲み上げ放流されたアユの成長を追跡して、放流効果を調査していきます。その結果をもとに、適正な放流場所や放流密度などを検証し、漁協経営の安定化につながる天然遡上アユの活用手法の開発に取り組んでいきます。



図1 遡上アユ採捕状況
(採捕装置は豊川水系連絡協議会メンバーにより設計・作成)



図2 4月中旬に採捕された遡上アユ(全長約10cm)

ついに完成！愛知水試のウナギ研究が新たなステージへ

栽培漁業グループ

現在、ウナギ養殖に用いられる種苗は100%天然のシラスウナギに依存しています。しかし、天然シラスウナギの採捕量は減少傾向にあり、安定してウナギ養殖が行われるためには、シラスウナギを人工的に大量生産する技術の開発が求められています。

本県では、これまで同技術開発を西尾市の内水面漁業研究所で実施していましたが、研究のスピードアップやシラスウナギの量産化に向けて、試験規模の拡大が必要なことから、昨年度、海水を十分に使用できる南知多町の漁業生産研究所に拠点を移し、必要な施設を整備しました。これにより、従来よりも多くの水槽を用いた飼育試験を行えるようになった他（図3）、10Lの半球体型水槽（図4）を用いて海水のかけ流しによる長期間の飼育が可能になりました。

また、本県は、水産庁の委託事業「令和7年度 ウナギ種苗の商業化に向けた大量生産システムの実用化事業」に参画し、他の研究機関と共同で試験を実施しており、新施設では、卵からふ化したばかりのウナギ仔魚（図5）に適した乾燥飼料の開発に関する飼育試験を行っています。

現在、ウナギ仔魚の飼育に用いられている粘性の高いスプ状の飼料は、給餌に手間がかかることや、冷凍保存が必要で保存性が悪いというデメリットがあります。一方、これまでに開発した乾燥飼料（図6）は、作業性や保存性が優れているものの、仔魚の成長がスプ状の飼料より劣っています。このため、仔魚の成長をより促進する乾燥飼料（図6）を開発し、将来的にシラスウナギの人工種苗が大量生産できるように技術開発を進めていきます。



図3 ウナギ仔魚飼育施設

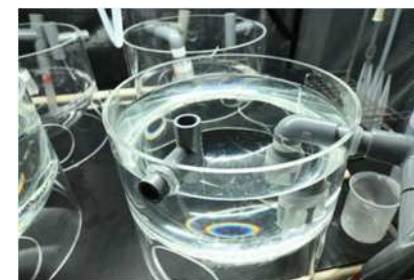


図4 ウナギ仔魚飼育に使用する半球体型水槽



図5 20日齢のウナギ仔魚(上)と乾燥飼料を食べたウナギ仔魚(下)



図6 乾燥飼料(左)とスプ状の飼料(右)